

山崎春之名誉総長のこれまでの歩み

「愛情教育」をモットーに、 ためまめ情熱

駿河台大学創立者の山崎春之が

駿台グループの運営に携わってから60年。

その生涯は、父である山崎寿春が掲げた「愛情教育」を教育理念に、 学園を飛躍的に発展させた歩みであった。(敬称略)

誕生と 寿春の情熱

山崎春之は1926(大正15)年2月4日、寿春の三男として、東京府豊多摩郡代々木山谷(現・東京都渋谷区代々木)で生まれた。父寿春は49歳だった。この年は12月25日に大正天皇が崩御され、1週間に満たないが、昭和と改元された年である。翌年に移り住んだ東京府保谷村(現・東京都西東京市)の敷地は約1,300坪(約4,300平方メートル)と広く、半分を近所の農家の人に手伝ってもらい畑にしていた。

当時、東京郊外の農村地帯とはいえ、広大な屋敷に移り住むことができたのは、寿春が大学教授と予備校経営をしていたからだろう。寿春は1878(明治11)年7月、素封家の三男

として鳥取県鳥取市に生まれた。1902(明治35年)に東京外国語学校(現・東京外国語大学)を卒業し、富山県高岡市の商業高校に勤務、2年後には広島県の私立明道中学校に教師として迎えられ、教鞭もつとめた。転機が訪れたのは1906(明治39)年。カリフォルニア州で大きな農場を経営していた長兄の勧めで、妻と生後間もない長男を残して単身渡米。28歳でアマースト大学に入学し、その後ハーバード大学で英文学、さらにエール大学大学院に入学してマスター・オブ・アーツの学位を取得した。その後半年かけてヨーロッパ各国の教育事情を視察し、1910(明治43)年12月に帰国。その翌年には明治大学教授に就き、1940(昭和15)年に辞任するまで英文学を講じた。

明治から大正に移る時期、明治・専修・法政などの大学ではその大学に入るための予備校を持ち、大学入学の実力がついた者は大学に編入させていた。根っから教師であった寿春は、明治大学での講義をこなしながら、夏休みなどにはこうした予備校で教え始めた。1916(大正5)年には、必死に勉強する受験生に合理的な勉強法を体得してほしいという願いから月刊誌「受験英語」を発売すると、翌年の1918(大正7)年には「東京高等受験講習会」を開設、1927(昭和2)年には神田駿河台袋町に「駿台高等豫備学校」を開いて常設予

備校の第一歩を踏み出した。1930(昭和5)年には「駿台高等予備校」が東京府から各種学校として認可された。駿台グループの源流である。

数え年5歳の七五三のお祝いの記念写真



数え年5歳の七五三のお祝いの記念写真



駿台高等予備校の当時の校舎

小学校から 大学

「愛情教育」をモットーに教育に情熱を注ぐ家庭に生まれた春之は、当時、池袋駅西口にあった府立豊島師範学校付属小学校に入学する。1911(明治44)年に開校した名門で、師範学校は1946(昭和21)年には小金井に移転して東京学芸大学となり、付属小学校は1964(昭和39)年に閉校した。学力優秀だった春之は、先生の勧めで開成中学校を受験する。試験当日、頭痛のために服用した売薬で眠気を催し、いつもなら15問中13問できた算数がこの日は7問しか解答できなかった。入学した明治中学では、名門中学に合格した実力があつたという自惚れから、まったく勉強せず、2年生の成績は最下位だった。

父寿春の 意思を継ぐ

1945(昭和20)年8月15日の終戦は自宅を迎え、終戦を告げる玉音放送を聴いたときは、とめどもない涙を流した。

その後も勉強がはじめていた。中学3、4年生のときはは大田区蒲田にあるプレス工場に勤労働員に駆り出され、1941(昭和16)年12月8日には太平洋戦争が開戦した。1年違いで徴兵を免れたが、明治大学に入学していた春之は1943(昭和18)年10月21日に神宮外苑競技場で挙行された「出陣学徒壮行会」では先輩たちを見送った。その春之も翌年には茨城県土浦市にある海軍の避難飛行場で学生航空隊の一員として訓練を受けたが、戦地で飛ぶことはなかった。

終戦後は明治大学商学部に復学した。卒業後は、姉の夫で当時大蔵省(現・財務省)にいた堀口定義に紹介された繊維貿易輸入公団に就職する。1947(昭和22)年制定の貿易公団法に基づいて設置され、繊維になる物資を輸入し、通産省(現・経済産業省)の生産計画に基づいて各工場に配分する業務を行っていた。管理貿易はいずれ自由化されると考えていた春之は、流動化する社会情勢に加え、役人らしくなっていく自分に嫌気を感じはじめた。そんなとき、主に繊維を扱い、商社に脱皮しようとしていた森五商店から声がかかる。同商店重役と大学同期の友人に「商社に脱皮するためにひと肌脱いでくれ」と説得され、1950(昭和25)年に入社。繊維貿易公団はその年の12月に廃止された。

森五では綿の販売に携わり、東京とその近県、2年目からは東北地方の小売店に注文を取る営業を担当した。このときの地方営業の経験が、後に駿台グループを運営するようになってから役立った。各ブランドの熱意を生かすためには、こちらも努力することを実体験で学んだのである。そのころ寿春はすでに老境にあつたが、息子たちに「継いでくれ」とは言わなかった。当時、英語の名物講師だった鈴木長十が何回か自宅を訪れ、「駿台高等豫備校は個人立各種学校で学校法人ではない。父上に万一のことがあれば、法定通り財産分けして終わる。3人の息子のだれかが継いではどうか」と提案した。ビジネスの面白さに魅かれていた春之には、まったく継ぐ気はなかった。学生時代に勤労働員や学生航空隊に駆り出され、勉強どころではなかった春之は、教育者にはふさわしくないという負い目もあつた。2人の兄は、春之よりも後継者になれる環境ではなかった。長男の章は慶応義塾大学卒業後、日本通運の前身である国際通運に入社し、部長になっていた。次男の兌は東京大学工学部を出て、旧国鉄の建築課長という立場にあつた。話が持ち込まれてから半年間、いつまでも末っ子の特権であるわがままを通すわけにもいかず、教育者の息子としての運命に従わなければという心境に陥った。そして森五で学んだ「時代の波」と予備校の社会的意義について考え始める。

26歳で 学園運営に参画

予備校について考えてみると、まさに「時代の波」が感じられた。駿台高等予

山崎春之名誉総長のこれまでの歩み

備校は1946(昭和21)年4月には戦災を免れた校舎で授業を再開、2,700人近くが学んでいた。終戦直後の荒廃した社会にあっても、将来を担う教育は嘗々として進められていた。

1949(昭和24)年には6校だった予備校は、3年後には17校になっている。急増は大学入学率の低下から裏付けられる。大学入学者数に対する志願者数である入学率は、1949(昭和24)年が50・8%、3年後には26%と、半分近くに低下している。教育への熱意が大量の浪人生を生み出し、予備校が「時代の波」となっている。こうした世の中の求めに応えることは男の仕事としてやり甲斐がある、と思うようになった。

とりわけ戦前からの実績を持つ駿台高等学校の存在価値は高い。学園運営に参画する意思を固めたのは1951(昭和26)年、春之は26歳になっていた。

最初に手掛けたのは、個人立各種学校から学校法人への脱皮だった。学校法人の法的基準は1949(昭和24)年施行の私立学校法である。認可申請では、定款、土地、建物、学生定員数、講師数、組織運営システムなど厳しい審査がある。認可する東京都の担当者とは、予備校の学校法人としての認可基準を駿台をベースに共同で進めた。駿台高等予備校は1952

(昭和27)年10月8日に学校法人駿台学園として認可され、春之が理事長と予備校校長に、春之は法人理事に就任した。



駿台の運営に参画したころ

(昭和27)年10月8日に学校法人駿台学園として認可され、春之が理事長と予備校校長に、春之は法人理事に就任した。

理事になった翌年、新宿区四谷1丁目約560平方メートルの土地を取得する。そのとき銀行に融資を申し込むが、定期預金を担保にしたうえで3割カットされた。経費節約を断行して難局を乗り切るが、この経験がその後の法人運営に生かされた。その意味で四谷校の開校は、その後の駿台学園の歴史の中でも重要な転機となる事業となった。教育の理想や理念は、経営基盤が確立していなければ実現しない。学校経営者には、理想と現実という二律背反をこなすことが重要な仕事と、実感した。

東京圏を離れた学校づくりは1970(昭和45)年がスタートである。最初は京都で、上京区に鉄筋4階建てのビルを取得した。市内には既設の予備校5校が激しく競合し、果たして京都府が予備校として認可するかが最大の難問であった。行政指導で4月開校の告知看板が立てられず、学生募集もままならない状況が続いた。認可書が交付されたのは1971(昭和46)年4月8日、新学期が始まる寸前であった。

1964(昭和39)年11月19日、寿春が胃ガンのため亡くなった。「愛情教育」に一生を捧げた87年だった。「愛情教育」は講師や学生を問わなかった。毎年秋には講師たち夫妻を歌舞伎座に招いて労をねぎらった。4月には2、3日ばかりで各

教室を回り、学生たちへの激励を欠かさなかった。亡くなる年も、前年から体調を崩していたので押し止めたが聞き入れず、学生たちが励ました。

駿台学園の運営は春之に引き継がれ、理事長となった春之は駿台高等予備校校長も兼務した。翌年には東校舎を改築するとともに、ニコライ堂側の大通りに面した土地の一角を取得して校地を拡張、新校舎建設にも着手した。翌年3月には各教室に冷暖房空調とエレベーターも備えた、地上5階地下2階の鉄筋コンクリート下の校舎が竣工。竣工式では寿春の等身大の銅像の除幕式も行い、病に伏していた母もつも車椅子に乗って列席した。

東京圏を離れた学校づくりは1970(昭和45)年がスタートである。最初は京都で、上京区に鉄筋4階建てのビルを取得した。市内には既設の予備校5校が激しく競合し、果たして京都府が予備校として認可するかが最大の難問であった。行政指導で4月開校の告知看板が立てられず、学生募集もままならない状況が続いた。認可書が交付されたのは1971(昭和46)年4月8日、新学期が始まる寸前であった。

1976(昭和51)年に学校教育法が改正され、各種学校の一部が専修学校として認可されるようになった。それまでの各種学校は「小、中、高、専、幼稚園以外のもの、学校教育に類する教育を行うもの」と規定され、内容等の基準については詳細な規定がなかった。全国各種学校総連合会が文部省に最初の基本方針を提出してから10年以上経て改正にこぎつけることができた。1964(昭和39)年から東京都私立各種学校協会の理事を務めていた春之はこの改正に尽力した。改正に伴って全国各種学校総連合会は全国専修学校各種学校総連合会と改称し、春之は常務理事に就任した。個人立各種学校として東京府から認可された1930(昭和5)年から50周年を迎えた1980(昭和55)年、校名を駿台高等予備校から駿台予備学校に変更し、専修学校として認可された。その記念事業の一環として、4月に新宿区市谷に市ヶ谷校を開校し、その後も次々と各種の専門学校を開校していく。全国各地はもとより、シンガポール校など海外での開校、学習アドバイザー制度の創設、全国入試模擬試験センター

駿台学園理事長に就任

専修学校制度に尽力



藍綬褒章

や国際教育センターの設置、通信教育、出版事業、コンピュータや教育用視聴覚(AV)教材の導入、衛星放送講座の開講など、受験予備校の枠を超えたさまざまな教育事業に取り組み、いずれも成果を挙げた。これらの功績に対して1985(昭和60)年、藍綬褒章を受章。受験生教育に取り組み一方、全国専修学校各種学校総連合会副会長、全国予備学校協議会副会長、東京都私立学校審議会委員などの要職も務め、特に専修学校制度の成立には十数年にわたって奔走するなど、多年の功績が認められたものだ。

大学創立への活動

寿春が礎を築いた駿台グループは、春之の時代の「波」に対する感性と、卓抜した経営手腕が目覚ましい発展を支えていった。春之が理事になった、ある日のことだ。「予備校が送り込んだ学生が真剣に学ぶ大学を、ゆくゆくはつくりたいものだ」と、寿春がポツリともらしたことがあった。押しつけている感じはなかったが、春之は「念願だけは知っていてほしい」と受け取った。「駿台グループで真の大学をつくらせよ」と寿春が夢みだした思いを、春之は、ひと時も忘れることはなかった。

寿春の夢の実現に春之が動き出したのは、文部省高等教育局私学行政課に足を運んだ1971(昭和46)年まで遡る。担当者からは、大学設置には借入金も認められないこと、設立までのハードルが高く、想像を超える時間がかかることとアドバイスされた。それを覚悟し、それからというもの、四谷校の開校の経験を生かして、現金が少しでもあれば定期預金にするというやり方で積立金づくりに励んだのである。



建設中の飯能キャンパス

資金計画の見通しも立つたところ、取引銀行から検討すると、取引銀行から「飯能市が大学誘致に熱心に動いている」という情報もたらされ、現地に出掛けた。森林組合が所有していた10万坪(約33万平方メートル)を教育用指定用地にしてあるが、その半分は環境保全のために残して造成という条件がついていた。もう一つの候補地だった東武鉄道所有地の条件と比べても適当と判断し、決めた。用地取得のため、地主に対して飯能市も先頭に立って説得。通常であれば10年かかるというられる用地買収も1983(昭和58)年9月にスタートしてから1年半ほどで終えることができた。

申請の半年ほど前から毎週のように開く。委員たちは「新しい大学をつくる」ことに情熱を傾け、現行大学が抱えている問題点を検討したり、新しい大学教育のあり方を探ってアイデアを出し合ったり、白熱した議論を展開した。大切な教授陣の構成と人選にも全力で取り組んだ。

文部省は、大学新設について大学設置審議会と学校法人審議会に諮問する。トラック3台分はあると思われる資料を整理し、それぞれの審議会が開かれるたびに審議委員全員に資料の冊子が行きわたるように40冊近く作成しなければならぬ。他方、埼玉県に対する大学用地造成と校舎建築のための開発申請は、当時34課全ての了解をとる必要があった。当時の飯能市助役が県庁担当者のもとに赴いて、熱心に動いてくれたこともあり、通常10年以上かかる申請作業が3年で済むことができた。大学設置の認可が下りたのは1986(昭和61)年12月25日。文部省に足を運んでから15年が経っていた。

駿河台大学の開学

駿河台大学の開学は1987(昭和62)年4月。春之が大学設置に向けて動き始めてから16年という長い歳月が流れていた。

大学は、埼玉県飯能市東南部に位置する狭山丘陵の豊かな自然に囲まれ、緑濃い山の一部を造成した30万平方メートルのキャンパスには、瀟洒な校舎が建設された。水平にならされた地面、それに対して垂直のアウトラインを見せる本部管理棟、講義棟、ゼミナール棟、体育館、学生会館などが美しいシルエットを描き、狭山丘陵に映えている。春之にはその光景が、かつて春春が体験したアメリカの大学、理想としたキャンパスの全体構想は、春之によるものだった。

開学前の1月25日には各界著名人を招いて竣工式を行い、キャンパスを披露した。挨拶にたった春之は「駿台の運営に携わってからのというもの、父は自分のやることに一切、口を挟まなかった。自分なりに工夫をして駿台の運営をしてきたが、果たして、父が思っていたような学園になったのだろうか、と思うことがある。しかし、この大学の設立については、父から聞かされていた理想の大学を目指し、自分なりにそれを実施したつもりである。きっと父も喜んでくれるだろう」と話した。駿河台大学は、春春が理想とした大学の実現であった。それは春春から春之へ、70年がかりで実現させたものだ。



開学した当時の飯能キャンパス

と話した。駿河台大学は、春春が理想とした大学の実現であった。それは春春から春之へ、70年がかりで実現させたものだ。

第1期となる新入生343名を迎える入学式は4月11日に行われた。春之は、大学設立の経緯や建学の精神を語り、「専門知識だけでなく、広い視野と豊かな見識、鋭い情勢判断と的確な行動力を兼ね備えた人物に成長してほしい」と説いた。大学設立の経緯や建学の精神を語る春之には、16年の歳月が走馬灯のように浮かび上がり、万感の思いが迫った。

校歌とキャンパスに込める

駿河台大学の創設には、春之が26歳で駿河台学園に加わってから積み重ねてきた経験や実績、教育に対する理想と理念のすべてを注ぎ込んだ。それは、キャンパスの全体を構想しただけでなく、例えば樹木の選定ひとつにまで自身の思いを込めた。

キャンパスには菩提樹を植え、大学のシンボルツリーにした。菩提樹は、釈迦が長い苦行の末にその下で悟り(菩提)を開いたといわれる木で、学ぶことの意味は悟りであると考えたからであった。開学の直前に決められた校章にも菩提樹の葉を図案化し、駿河台大学で学ぶことの意味、理想を込めている。

光あふれる菩提樹の葉陰に映える学び舎は、私たちの理想と学問の城

冒頭に、大学のシンボルツリーである菩提樹を出し、山々と緑の入間川の清流に囲まれた自然の中で学ぶことの素晴らしさを描いた。その地にある大学は、学問の城であり、砦であるの思いだ。作曲は團伊玖磨氏である。最初から團伊玖磨氏に決めていた。我が国最高の作曲家に自分の思いの表現を委ねたかったのだ。

新入生たちがキャンパスで目を輝かせている姿は、目撃した春之は、キャンパスの設備整備を急ピッチに進める。5月にはナイター用照明の完備した9面のテニスコート、10月には全天候型陸上競技場、12月にはゴルフ練習場など運動施設を完成させた。IT機器の導入は当初から積極的に進め、開学2年目の11月には各教室に本格的な教育用視聴覚(AV)設備を設置している。

プロジェクトチームの心意気であった。これからの時代、すべての学問は国際的でなければならず、グローバルな視野を持った人材を育成するのは当たり前のこと。情報化時代には、どの学部の学生でも情報を自在に受信・発信できるスキルを持たねばならないという考えからだった。

第1期生の中には有名私立大学や国立大学に合格しながら、駿河台予備学校を母体とする駿河台大学を選び、司法試験や公務員試験に挑もうとする学生が多かった。あらためて受験生にとつての駿台ブランドの評価の高さを知り、大学としてもこの要望に応えたいと考えた。開学した年の5月には課外講座として司法研修室を設置、在学生の半数近い学生が登録、高い意欲を示した。これは春之にとつて建学の喜びのひとつになった。

独自のカリキュラム

3学部以上の文科系総合大学の設立を目指したが、スタートは法学部のみのものであった。埼玉県西部地区の大学に法学部がなく、「ぜひ法学部を」という地域からの要望に応えたものである。開学当時は、「国際情報」の名のつく学部が他大学で次々に新設されていたが、この2つを教育目標の柱としながらも、あえてこれらの学部を避けたのは、春之をはじめとする

上も経って1人も合格者を出していない大学もある。短期間で目標の一つを成し遂げたのは「実学の精神」による教育成果であり、感慨深いものがあった。

「実学の精神」を学ぶカリキュラムには独自性がある。入学初年度からのゼミナール開設、外国語教育や海外短期語学研修、派遣留学、交換留学などの実施、情報教育を重視し、専門教育と教養教育を組み合わせた「くさび型」カリキュラムの実施などだ。

大学の伝統的行事の一つに大学祭があり、大学の行事の中で欠かせない。新たな伝統を刻み始めたばかりだったが、開学した年の11月21・22・23日の3日間、第1回駿輝祭を開催した。1年生のみ300人余りの大学祭だったが、実行委員

プロジェクチームの心意気であった。これからの時代、すべての学問は国際的でなければならず、グローバルな視野を持った人材を育成するのは当たり前のこと。情報化時代には、どの学部の学生でも情報を自在に受信・発信できるスキルを持たねばならないという考えからだった。

第1期生の中には有名私立大学や国立大学に合格しながら、駿河台予備学校を母体とする駿河台大学を選び、司法試験や公務員試験に挑もうとする学生が多かった。あらためて受験生にとつての駿台ブランドの評価の高さを知り、大学としてもこの要望に応えたいと考えた。開学した年の5月には課外講座として司法研修室を設置、在学生の半数近い学生が登録、高い意欲を示した。これは春之にとつて建学の喜びのひとつになった。

「実学の精神」を学ぶカリキュラムには独自性がある。入学初年度からのゼミナール開設、外国語教育や海外短期語学研修、派遣留学、交換留学などの実施、情報教育を重視し、専門教育と教養教育を組み合わせた「くさび型」カリキュラムの実施などだ。

大学の伝統的行事の一つに大学祭があり、大学の行事の中で欠かせない。新たな伝統を刻み始めたばかりだったが、開学した年の11月21・22・23日の3日間、第1回駿輝祭を開催した。1年生のみ300人余りの大学祭だったが、実行委員



第11回駿輝祭の様子

初代総長に就任

文科系総合大学をつくる——これが当初からの構想であり、飯能市と埼玉県にも2学部以上の大学をつくるという約束もあって、開学の翌年7月には経済学部設置認可申請書を文部大臣に提出し、併せて第2講義棟建設などのキャンパス第2期工事に着手した。経済学部は1989(平成元)年12月22日に認可され、翌年4月から、駿河台大学の第2の学部としてスタートした。文部省や大学設置・学校法人審議会が大学運営にかける熱意を高く評価したことを示すものといえる。

第2期工事は経済学部発足に先立ってすべて完了。

山崎春之名誉総長のこれまでの歩み

新しく誕生した第2講義棟は地上15階、地下1階建てである。狭山丘陵にそびえる威容は校歌にうたう「我らの理想と学問の城」と呼ぶにふさわしいものとなった。内部には情報科学センターと視聴覚センターが開設され、それぞれ最先端の施設を完備。

情報化時代を先取りするインターネット・キャンパスを完成させたのである。大学の設置母体である「学校法人駿河台学園」は駿台予備学校をはじめとして全国に多数の学校を設置し、その所轄する官庁も文部省をはじめ各都道府県庁も混在、法人運営が非常に複雑なものとなっていた。

運営形態を明確にする必要があり、駿河台大学と駿河台学園第一幼稚園を学校法人駿河台学園から分離・独立させ、新しく「学校法人駿河台大学」を設立することにした。学校法人駿河台大学は1990(平成2)年9月1日に認可された。学校の教育を統括する職として総長を置くことになり、春之が初代総長と理事長に就任した。

1991(平成3)年3月には、駿河台大学で初めて



卒業記念パーティーで卒業生とともに

に努めるとともに、私学振興に貢献した業績が認められたもので、6人の受賞者の1人に選ばれた。京都大学会館で行われた授賞式後の懇親会で、自分が歩んできた教育事業の道について語り、今後もさらに学園全体で「愛情教育」を実践していく決意を述べた。

大学では、第3の学部として文化情報学部を設置した。つねに「国際化」と「情報化」を意識していたから、次につくる学部を「情報」とした。大学設置基準はその大綱で、従来の教養と専門の垣根を取り払うことを規定していたので、教養担当の教員からは人文科学系学部の新設を望む声が強くなり、春之もその声に応えたいと思っていた。第3学部として開学当初から、「国際学部」などが構想されていたが、文部省からは、1992(平成4)年から新学部設置は社会的要請の高いものに限りという原則抑制の方針が出されていた。その為、その抑制の例外であった情報関連である文化情報学部が決定したという経緯がある。新学部の増設で3学部からなる総合大学となり、その2年後には、5,000人キャンパスが実現した。

総合大学へ成長

開学から7年となった1994(平成6)年は、春之が駿台グループの指揮を執って30年目という節目の年だった。

2月4日に社団法人全国日本学士会からアカデミア賞を受けた。全国日本学士会は1946(昭和21)年に創設されて以来、教育、学術、文化の振興を目的としており、アカデミア賞はその活動の一環として行っている功労者顕彰である。多年にわたって青少年の育成

識も強い。大学内に事務局を置き、駿輝祭にホームカミングデーを開催している。卒業生がこの日に大学を訪ねてきてくれることは、春之の無上の喜びとなった。このころから私立大学への入学志願者の減少傾向が進んでいたが、駿河台大学では前年比8%増となり、新設大学とはいえない人の健在ぶりを示していた。

この年の12月には第4の学部として現代文化学部の設置認可があり、開学10周年を迎えた翌1997(平成9)年には現代文化学部比較文化学科を開設した。法学部、経済学部、文化情報学部、現代文化学部と、大学院の各研究科を併設す

る文科系総合大学に成長させることができた。開学10周年の記念事業として、21世紀の高度情報化時代に備えたメディアセンターの建設に着手し、1999(平成11)年11月に完成。既存の図書館、情報科学センター、視聴覚センターの機能を統合して、時代の変化への対応を実現するためのもので、21世紀を担う人材の育成に寄与できるものである。

21世紀を迎える前後から、司法専門職業人養成のためのロースクール(法科大学院)構想が取りざたされ、2003(平成15)年に法案が可決されると、各大学で設置申請が行われた。駿河台大学でも2004



大学10周年記念祝賀会で鏡開きをする総長(当時)

(平成16)年内の開設に向けて、法科大学院の設立準備を急いだ。1学年60名、収容定員180名を想定して、お茶の水に専用校舎を設置することを決めた。

3代目にバトンを渡す

2007(平成19)年に

創立20周年、人間にすれば成人式を迎えた。この年を大学設立時の第1期計画最終年と考え、グラウンド整備の拡充や、収容スペース約300室の学生寮の新設などの整備計画を記念事業と位置づけた。いずれも20周年の前年度内に完成させた。

大学のロゴマークを制定したのも、20周年の記念事業である。駿河台大学のアルファベットの頭文字「S」を21世紀に羽ばたく鳥の形にシンボライズし、それに世界に羽ばたく人材を輩出する大学の意味を込めた。ブルーは入間川の流れ、グリーンは狭山丘陵を表し、豊かな自然環境にある大学をイメージさせるものとなった。春之が夢みた大学を、春之が創立して20年経ち、順調に成長してきた。これを機に次代に引き渡すこと



20周年記念事業の学生寮竣工式で挨拶する総長(当時)

が、大学のさらなる発展になると考え、息子の山崎善久を学校法人の理事長に、大学を統轄する総長には1999(平成11)年から学長を務めていた竹下守夫が就任し、自らは第一線から身を引き、名誉総長となった。

善久は駿河台大学法学部卒業、同大学院法学研究科を修了し、学校法人駿河台大学に入職後、事務局長、常務理事等を務め、駿河台大学一筋である。「愛情教育」の継承者として最適な人材である。ロゴマークで駿河台大学の「S」を未来に羽ばたく鳥にシンボライズしたように、善久が駿河台大学を羽ばたかせてくれるだろう。善久にバトンを渡して安心した春之は2010(平成22)年1月13日、永眠。春之から引き継いだ「愛情教育」に捧げた83年の生涯であった。



学校法人駿河台大学名誉総長
山崎春之先生を偲んで
日本私立大学協会会長
大沼 淳

学校法人駿河台大学 名誉総長 山崎春之先生が、平成22年1月13日、病氣療養中のご逝去されました。

我々、私学人一同は、真の私学人としての気骨ある指導者を失いました。厳粛なる事実、深い悲しみの念を禁じ得ません。

特に私は、故山崎先生とは、40数年に亘り学校関係の友人として交誼をいたいただき、その間のさまざまな思い出は尽きぬものがございます。

顧みますと、先生は、昭和23年に明治大学商学部を卒業され、昭和39年に学校法人駿河台学園の理事長に就任されました。その後、先生は高邁なる教育理念である「愛情教育」の具現者として、受験生教育に取り組み、予備学校を全国に展開されました。

ちょうど先生が理事長になられたその年に、私が若輩ながら、全国各種学校総連合会の理事長に就任いたしました。私のまわりは私より遙かに年長の先輩ばかりでした。そんな中であって、年の近い山崎先生には全国の予備学校協議会

の責任者としてご参加いただき、随分と助けていただきました。

昭和50年台の前半には、

(現)駿台甲府高等学校の前身から、私に経営の話がございました。しかし、私も文化学園は主たる教育は女子でしたので、山崎先生にご相談をいたしましたところ、快く引き受けてくださいました。その後30年が経ち、駿台甲府高等学校は、小・中・高一貫教育の学校へと発展し、山梨県内随一の進学校として実績を挙げておられます。これも偏に山崎先生の秀でた経営手腕の賜物だと思います。

また、先生が永年、夢として語られた大学の開設につきまして、ご相談に預かることができましたことも、とても光栄なことであり、今となっては、懐かしき思い出としてよみがえってまいります。そして、昭和62年、法学部の単科大学として、念願の駿河台大学を開学され、現在、私が会長を務めております日本私立大学協会にも加盟していただきました。平成2年には、学校法人として独立した駿河台大学の理事長・総長に、平成19年には、名誉総長に就任されました。この間、単科大学として開学された駿河台大学を大学院及び5学部を擁する文科系総合大学へと導かれました。

このように山崎先生は、卓越した経営手腕と私学教育に対するみなぎる情熱をもって、実に46年の永きに亘り、駿河台大学をはじめとする駿台グループの発展に心血を傾注されてこられたのであります。昭和60年には、先生の係るご功績に対し、国は「藍綬褒章」を授けられ、この輝かしい栄光を永く讃えております。更に、平成6年には、社団法人全国日本学士会より、我が国の私学振興に貢献した顕著な業績が認められ「アカデミア賞」を授けられました。

先生はその生涯を通して、慈父のごとく学校法人駿河台大学を始めとされる駿台グループを愛し、我が国の私立学校の振興に捧げ尽されたのであります。私学人一同、その崇高なるご生涯に対し、深甚なる感謝と敬意を表する次第であります。

先生の生前の数々のご功績は、学校法人駿河台大学山崎善久理事長を始めとされる駿台グループ関係各位の胸に永遠に継承され、必ずや一層の隆昌がもたらされることと、深く確信いたします。

我々も、絶えず先生のご遺風を偲び、協力一致のもとに叡智を結集し、私学に課せられた責務を果たすべく決意と覚悟を新たにいたしております。

ここに、日本私立大学協会を代表して、謹んで故山崎春之先生のご冥福を祈り、生前の数々のご功績に対し、衷心より敬意を表しますとともに、感謝の念を捧げ、追悼の言葉といたします。

追悼の言葉といたします。

故山崎春之名誉総長を偲んで



山崎春之先生を偲んで
埼玉県飯能市長
沢辺 静吉

山崎春之先生と飯能市とは、昭和62年に駿河台大学が本市に開学する頃からお付き合いをさせていただきました。

このたび、突然の訃報を耳にしたときは、大きな驚きと無念さを痛感いたしました。

貴校の本市への開学にあたりましては、昭和50年台に大学の誘致に向けて大学誘致委員会を設置し、各方面に積極的に関わり、誘致活動に取り組んでおりました。そうした中、当時、私は市議会議員として先生とのお付き合いが始まりました。

ひとりに大学の設置と言いつても、計画づくりから関係機関への申請、あるいは校舎等の建設工事など、開学に向けた様々な手続きや進捗管理などに、大変なご苦労を必要とするため、本市といたしましても可能な限り設置に向けたお手伝いをさせていただきました。

そうした先生のご苦労により、本市における貴校がスタートされましたことは、当時の飯能市民にとつて大きな期待と喜びで街中

が盛り上がったことを今でも記憶しております。貴校は、先代の寿春先生のご遺志を引き継ぎ、「愛情教育」を基礎に学生が真剣に学ぶ本物の大学づくりを目指し、徹底した人格教育を通して豊かな知的教養と国際的感覚を備えた人材を養成し、社会の発展に寄与することを目的としており、毎年、多くの学生が社会へ進出し、様々な分野でご活躍をされていることを伺っております。

私は市長としての公務の中で、市長室から望み貴校の学舎を大変風格があり、凛々しい風貌として毎日眺めておりますが、度々、映画やテレビドラマのロケ地としても活用されるなど、本市のPRにも大きく寄与していただいております。また、貴校と本市では、それぞれの特性を生かした取り組みを連携させていただいております。中でも「駿大の森」百年協定に基づく飯能活性化事業では、豊かな自然環境を有し、「森林文化都市」を宣言している本市ならではの地域資源を生かした事業であり、本市は100年間にわたり土地を無償で提供させていただき、森林育成や保全活動、里山づくりなどを産官学が連携した実践教育の場として活用していただいております。

このほか、「市民のための法律相談」、開かれた大学・地域に密着した大学として「公開講座」の開催、「大

学院委託生」の受け入れ、共同調査など、様々な分野でのご支援とご協力をいただいております。心から感謝を申し上げます。

また、「ホッケーのまち飯能」として取り組んでいる本市ですが、先生におかれましては、早速、大学の女子ホッケー部を、続いて男子ホッケー部を設立していただき、さらに人工芝のホッケー場も整備していただきました。このことにより、小・中・高・大学、そして社会人と世代を貫いた力強いチームが活躍が続いています。

先生亡き後の貴校も、先生の遺志を引き継ぎ、学生一人ひとりの個性を最大限に尊重した教育や、大学としての役割と社会や地域への貢献等に邁進されることと存じます。

結びに、先生の教育者としての素晴らしいご功績と温かい人柄を偲びつつ、生前いただきましたご恩に厚く御礼を申し上げますとともに、安らかなるご冥福をお祈り申し上げます。お別れの言葉といたします。





心の拠り所を失った思い

駿河台大学学長 成田憲彦

学校法人駿河台大学名誉総長山崎春之先生におかれましては、兼ねてよりご病氣療養中のところ、去る1月13日、享年83歳にてご逝去されました。一日も早いご平癒をお祈りしていた駿河台大学の教職員一同にとつては、誠に痛恨の極みであり、心の拠り所の大きな柱を失った思いであります。先生の生涯は、教育者としての生涯であるとともに、教育事業者としてのそれであられました。

教育者とは、その見識と人格で人を感化するものです。先生は、お父君であられる学校法人駿河台学園の創立者、山崎寿春先生から受け継がれた「愛情教育」の理念に沿って、学生一人ひとりを大切にする教育を実践されました。古武士を思わせる凛とした風貌に、時には近寄り難い雰囲気も漂わせながらも、内面には熱い教育者としての血をたぎらせておられました。恐らく学生たちは、先生のお姿に、自分たちの学び舎における教育者の原像を見ていたに違いありません。しかし先生の最も大きな功績は、教育の恩恵をより

多くの人に及ぼさせる教育事業者としてのそれでありましょう。先生は、お父君から受け継がれた予備学校を全国展開されたのみならず、駿河台学園を幼稚園から小中、高等学校、そして大学に加えて、多くの専門学校に、更に教育研究所や文庫などの教育サポート機関や関連部門を含む一大総合教育機関に育て上げられました。

教育事業は、単に損得の計算だけでは成り立ちません。その核となるのは、教育への情熱であり、子どもたちが何を学びたがっているのかを知り、それをどのようにサポートしてやるべきかを洞察する構想力でしょう。恐らく「愛情教育」は、教職員への訓示の言葉である以上に、先生が自らの事業展開の最大の拠り所としたものであったに違いありません。

駿河台大学は、先生の教育事業の集大成の意味も込めて、昭和62年に創立されましたが、そのキャンパスの設計にも先生の教育事業の哲学が込められていたように思われてなりません。先生がご健在のうちに、常に総長室に大学の建築模型を飾られておられたことから、大学の建物群とキャンパスへの先生の並々なぬご愛着がうかがわれ、それはまた先生が教育に何を込めなければならぬかを日々反芻されておられた証でもあったように思われます。とんがり屋根の時計台の夢ある講義棟、近代性を象

徴するような第2講義棟、最新の機器・施設と物語性を兼ね備えたメディアセンター、そしてこれらの建築群の中央に広がる芝生と植え込み。先生は、建物の一つ一つ、木々の一本一本にこだわられました。それは、即ち自らの教育哲学の形にこだわられたということだったのでしょ。

私も所用で何度か総長室をお訪ねする機会がありましたが、そのたびに建築模型を前に、これからの構想なども含め、大学への様々な思いを熱い口調でお話しくださったことが思い出されます。

平成7年に法学部に着任した私は、大学創生期における先生のリーダーシップに直接接する機会を持ちませんでした。その頃はむしろ既に教育内容の多くを学長以下の教員に委ねるようになっておられたようでした。しかしその先生が最後までこだわられたのが、3・4年ゼミの必修化でした。学生の就職とそのため のキャリア教育が各大学共通に課題となっている今日、3・4年ゼミは、大学教育には欠かせないものになっています。そこにも先生の哲学と先見性がうかがわれます。先生が逝かれた後も、教職員一同結束して、先生の教育哲学を導きとして駿河台大学を発展させていくことをお誓い申し上げます。山崎春之先生のご功績に感謝し、心からご冥福をお祈り申し上げます。



巨星の残像を求めて

学校法人駿河台大学常任理事 吉田邦久

山崎春之名誉総長は、「カリスマ」の語が似合う人はいなかった。カリスマ中のカリスマであったと思う。

小生が山崎春之名誉総長(学園長)と出会ってからもう40年あまりになる。近くの大学で生物学の研究をしながら、駿台予備学校の講師を勤め始めて間もなくであった。こちらはまだ20歳台であったが、「よろしくたのみます」と腰を低くされたの、何か氏にはオーラのようなのを感じた。その後なぜか駿台を辞められず、30歳そこそこで小生は生物科の主任を引き受けることになった。駿台はその後全国展開し、京都、大阪、名古屋、札幌、神戸、福岡、仙台へと進出していった。そのような中で、小生もいろいろな会合で春之氏に近い席に座ることが多くなり、顔と名も覚えられた。

それからしばらくして、大学設立の話が持ち上がり、当時立教大学の一般教育部にいた小生に、大学設置準備委員会のメンバーとして教養のほうの構想を練ってほしいと依頼されたのである。いろいろ迷うと

ころであったが、学園長の春之氏に直に頼まれれば断ることはできず、準備委員会メンバーに加わったのであった。小生を除くと、星川長七氏をはじめ、早大、慶大、東大、明大の定年退職前後の錚々たる法学者が大学設置準備委員会を構成した。もちろん準備室長は春之氏であった。小生は約45歳でひとり年代が離れたいたが、不遜にも、新しい大学の理念はこうでなければならぬ、専門演習は1年から始めるべきだ、などと主張し、春之氏も「あんたの言うのを入れなければよかった」と言われたことがあったという。しかし、春之氏は大学の構想を任せっぱなしにはしなかった。何度か「そんなことまでは頼んでいない」と雷が落ちることがあった。

大学ができてからも、カリスマ総長の面目躍如であった。例えば、最初キャンパスは二段造成されていたのだが、一段でなければと、費用は度外視して直させた。空調が効いていないと、温度調整器をそばにあった消火器でぶっ壊した。そのような例は枚挙に遑がない。小生も何度か机を叩いて怒鳴られた。その意味では怖い総長であった。

しかし、ただ怖い総長であったのではない。これ以上ない強い信念と責任感があった。したがって、いい加減な提案をする者は許せないのであった。その代わり、こちらが本当に真剣であることがわかると、一度は断つたかに見えながら、忘れた頃になって、「先生の提案を実現させることにした」ということが度々あった。その類まれなカリスマ性が人を引きつけて離さない魅力となっていたのだと思う。

昨年から本学は大幅改組に踏み切った。しかし、春之氏は病に伏しておられてご意見を伺うこともできなかったが、小生はつねに、春之名誉総長ならばどうお考えだろう、この案で春之総長の意に沿うだろうかというのを基準にしていた。今、その巨星は墜ちてしまったが、小生はこれからも氏の強い残像を見つめて、駿台のために尽くしていきたいと思う。



総長(当時・右)とともに



遺族代表挨拶

学校法人駿河台大学 理事長
山崎善久

このたびは、本学創立者の名誉総長 山崎春之永眠に際して、ご懇篤なる追悼をいただき、誠にありがとうございました。大学の代表として、また、父 春之の親族として、心よりお礼申し上げます。

故人は、一昨年に発症した肺腺癌のため、去る平成22年1月13日の夕刻に永眠いたしました(享年83歳)。葬儀は、日蓮宗常光寺(山梨県東八代郡中道町)のご住職、室住泰基上人を始め五人の僧侶により厳粛な儀式を近親者で密葬にて済ませました。故人には「久遠院殿常光日春大居士」の戒名をいただきました。

大正15年生れの故人は、まさに激動の昭和から平成へと生き抜いてきた男であり、そのような人の男の生き方に対して、私はいま、改めて「ご苦労さま」と「ありがとう」ということばを送りたいと思います。

生前、室住上人が故人へ、「駿河台大学を含む『駿台グループ』がこれまで発展した秘訣は何ですか」という質問をしたのに対して、故人が「自身の努力や秘訣というよりは、教職員の皆さんが奮闘努力をしてくれた御陰です」と回答したというエピソードを伺いました。同上人は、釈然としない回答に三度同じ質問をしたそうですが、どれも同じ回答だったということです。故人の傍で仕事をしておりまして、足を引っ張ることが多かった者として、私は何か救われる思いがいたしました。故人から、皆様に感謝の意を直接にお伝えする機会はありませんでしたが、故人が全身全霊で教育事業に尽くすことが出来たのも、皆様からの御厚誼の賜物であると、故人に代わり私から深謝申し上げます。

来る3月29日(月)午後1時より、故人の「お別れの会」を執り行う運びであり、4月以降にも故人を「偲ぶ会」が開かれる予定でもありますので、本学関係者の皆様におかれましては、御列席を賜れば幸甚に存じます。

今後とも皆様には、故人の生前に変わりませぬ御指導、御鞭撻を賜りますよう、また、本学の充実・発展のため種々御協力、御尽力を賜りますよう心からお願い申し上げます。

故山崎春之「お別れの会」のご案内



●日 時：2010(平成22)年3月29日(月)午後1時～3時

●場 所：東京都青山葬儀所
(東京都港区南青山2-33-20 TEL03-3401-3653)
◆東京メトロ千代田線「乃木坂」下車(5番出口徒歩3分)
◆東京メトロ銀座線・半蔵門線、
都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」下車
(5番出口徒歩12分)

「お別れの会」委員長 学校法人駿河台大学総長 竹下守夫
喪 主 学校法人駿河台学園理事長 山崎良子

ご来臨の節は、平服にてお越しく下さい。
なお、誠に勝手ながらご香典、ご供物の儀は
固くご辞退申し上げます。

【お問い合わせ先】

学校法人駿河台大学 法人局総務部総合企画課
☎042-972-1141